

【論文紹介】

1 タイトル 「西北九州の大珠
—長崎県・大野台支石墓群と狸山支石墓群の大珠再検討—」

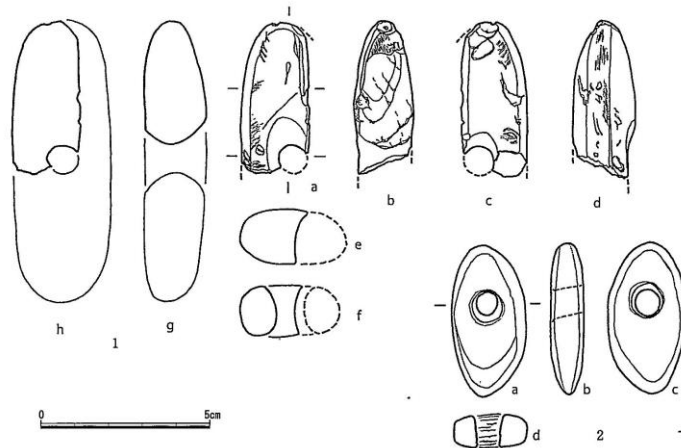
2 著者 水ノ江和同（同志社大学）
大坪志子（熊本大学）
中尾篤志（長崎県教育庁）
柳田裕三（佐世保市教育委員会事務局）

3 掲載誌 『九州考古学』第98号 2023年11月 九州考古学会

4 論 旨 全国的に大珠の出現時期は縄文時代中期中葉で、九州では後期初頭に出現する。そして西日本全体としては縄文時代後期前葉まで使用している。そのような中、本県では弥生早期（＝縄文晩期末葉）の大野台支石墓（佐世保市）と狸山支石墓（佐々町）からそれぞれ1点ずつ大珠が出土している。前者は緑色の美石、後者がヒスイ製で、時代的に最も新しい大珠である。しかしながら、いずれも実測図などの情報が公表されていなかったため、詳細が不明であった。

今回の検討の結果、狸山支石墓のそれは確実に支石墓の副葬品であることが判明した。一方、大野台支石墓のそれは支石墓とは関連が無く、縄文時代後期初頭に作られたという結論を得た。その結果、大野台支石墓の大珠が示す考古学的意義として、九州のヒスイ製の大珠は貴重な石材として再加工され、継承・使用（伝世）され続けたことが示された。

【文責】古門



第4図 大野台大珠 (1) と狸山大珠 (2)

紹介論文より転載 (S=1/2)